慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	御園生等 新田俊三共著 独占価格
Sub Title	Monopoly price, by H. Misono and S. Nitta
Author	增田, 寿男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.4 (1968. 4) ,p.500(118)- 505(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19680401-0118
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680401-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

そこで成立する 利子率、 視点を無視することはできない。問題は、かかる再編成が、 る主体によって、いかなる歴史的契機のもとでなされてゆくのかと いうことなのである。この過程は、 こうしたなかで、資本市場の展開を包含する金融市場の確立という 基軸とした信用関係の再編成過程であったとしなければならない。 は、個々の信用手段のうえでの革新にではなく、産業資本の展開を 会変革の過程としての産業革命期に、金融上の革新があったとすれ を知りうるにすぎないということを物語っている。ましてや、 した方法から、 産の比率の増大化傾向といった量的把握でもっては、そのごく一端 金融的革新を言うことは、無意味であろう。 及びその 動態として 現象してくるのであ 具体的に金融市場の構成とか、 一大社 いかな <u>と</u>

新田俊三共著

「独占価格」

増田寿

男

(--)

近年、わが国の独占分析は、その中心である独占価格研究におい

る。 特に市場構造分析を中心として発展してきているということができたしての「産業組織論」を批判・検討するというかたちで進展し、としての「産業組織論」を批判・検討するというかたちで進展し、る。これらの独占価格研究は、いずれもアメリカの独占研究の方法て、理論面においても実証面においても数多くの進展を示しつつあて、理論面においても実証面においても数多くの進展を示しつつあ

介・検討することにする。いる。本稿では全体の紹介はさけ、その主要な論点を私 な り に 紹いる。本稿では全体の紹介はさけ、その主要な論点を私 な り に 紹本書はかような意図のもとに第一部第二部の二つから構成されて

=

図とされている。その内容は次のようなものである。第一部は独占価格論を段階論として分析することがその主要な意

階論の一般的規定であるとし、「独占的 大企業の 蓄積様式は、そのヒルファーディングによって発展させられた「株式会社」論を、段著者は、マルクスの資本の集積・集中論を原理論として把握し、

(株式会社)巨大な生産力を、一定の市場の需要条件に適応せしめることによって確立される」(五六頁、()内増田)と主張される。そして独占的大企業の蓄積様式は「市場と生産の大部分を支配下におき、その利益圏を 確保することを もって 開始される」(五六頁)と主張されている。 それゆえ独占的大企業の蓄積様式と、その市場支配の戦略的機能である独占価格は、各国の資本主義、各市場条件によって具体的に分析されることになる。著者は、これらの具体的表現をレールと鋼鉄船という重鋼品が中心の産業構造の未成熟な段階でのドイツ鉄鋼業と、産業構造が高度化した段階での自動車工業を中心とするアメリカにおいてみておられる。そして次のように独占価格を規定されている。

する傾向がある。 、独占価格は、大企業の市場支配のための戦略的機能をもつ協 でもたらすための外的障壁であり、この外的障壁は市場の構造的 にで設定される。それは長期的な観点から大企業の収益と経営の安 定価格であって、中小企業あるいはアウトサイダーとの関連をとお でのが、大企業の市場支配のための戦略的機能をもつ協

の規定とである。

の基礎を与えられる。二、独占価格の戦略的機能は、大企業による技術進歩によってそ

る。(一四三~四頁)。 三、外的障壁の内部では、大企業相互の非価格競争が 展 開 さ れ

⑴ 独占価格を具体化するための方法としての「産業組織論」のれている。その主要内容は次のようなものである。第二部は現状分析的な視点から独占価格の具体的な解明が行なわ

批判的検討。

の四つの要因を検討しておられる。著者の積極的論点は集積集中の 中での一般的集中度の重視と「範疇としての独占価格」(一六四頁) ものとして、 されている。 し、この批判点に立脚して「産業組織論」の要因基準のうち重要な アメリカ的独占形態の一般化、の二点において大きな欠陥をもつと 義段階とを本質的に区分する共通基準を解明する必要性を強調し、 を確認したうえで、しかしながら同時に独占資本主義段階と自由主 相異等に応じ具体的特殊性をもって分析されなければならないこと 「産業組織論」を批判・検討することによってこの基準を明らかに 著者は、 第一部の結論から独占価格が各国それぞれの発展段階の 川集積集中、 著者は「産業組織論」が臼歴史的観点の欠除、臼特殊 (2)参入障壁、 (3)製品差別、

ある。……したがって、もし変動する価格であっても、生産価格以々刻々の変化をつうずる長期的な趨勢としてそうあるということで用価格+平均利潤)に一致するのは、市場需給の条件に 対応して 時素たりうる。(一七一頁)。「競争価格 (非独占価格) が、生産価格 (費象的に考えれば、寡占間の参入競争は独占価格の上限を規定する要象的に考えれば、寡占間の参入競争は独占価格の上限を規定する要

書

一九(五〇二)

である。 、大障壁によって規定されている価格としていることは以上で明らかとしての独占価格」を生産価格以上の価格であって、その上限が参独占価格というべきである。」(一九〇~一頁、傍点増田)。著者が「範疇下には下ることが全くないか、あるいはまれであるという場合には、下には下ることが全くないか、あるいはまれであるという場合には、

(2) 日本の独占価格の特質の解明。

その特質を三点に要約されている。 格、カルテル価格、製品差別化価格の三つの形態について分析し、うな市場条件に規定されたわが国の製品別の独占価格 を、 管 理 価市場集中度の低下傾向が一般的であることを強調し、そしてこのよ度成長によって参入障壁が弱められたため、巨大企業の参入による基盤としての諸要因を著者は戦後日本に適用し、わが国の場合、高基としてのような「産業組織論」の批判・検討による独占価格の存立以上のような「産業組織論」の批判・検討による独占価格の存立

- ある独占価格である。 一、現代日本の独占価格に特徴的なのは、長期的には低下傾向に

頁)。 三、日本の独占価格の典型は カルテル価格で あ る。(二八〇~一

(三)

が、次に本書の問題点を指摘してみたい。 以上私は本書の主要内要を 第一部・第二部に わたって みて きた

思われる。 第一の点は、独占価格論を段階論・現状分析論として展開すると格が分析されているといえる。このことは次のような理論によって独占価張されているが、本書も方法的にはこのような理論によって独占価格が分析されているといえる。字野弘蔵氏を中心とする人々は経済学を原第一の点は、独占価格論を段階論・現状分析論として展開すると思われる。

う面では共通性をもって にとどまり、独占価格そのものは両国においても価格の硬直化と ってしまっている。著者の主張する各国資本主義における独占価格 金融資本のタイプの検出という面のみが強調されてしまうことに アメリカの実証分析においても独占価格そのもののもつ意味よりも このような著者の「段階論としての独占価格論」の欠陥はドイツと の市場政策という政策面に主眼がおかれてしまっているといえる。 あるにもかかわらず、そのことは全く解明されず、 価格規定においても、 は、大企業の市場支配のための戦略的機能」(一四三頁)という独占 的大企業の蓄積様式が明らかになるから で あ る。 また「独占価格 らかにならない。というのは独占価格が解明されてこそ初めて独占 の指標とみておられるが、これでは独占価格そのものはひとつも明 頁 という両面をもつ独占的大企業の蓄積様式の確立をもって独占価格 タイプもドイツとアメリカでの市場条件の差異のみが分析される が不明確であること。 著者は独占の競争力の強化と市場支配力 著者の主張される「段階論の次元での独占価格の分析」(一三 独占資本の市場支配力そのものが独占価格で いるという皮肉な結果になってしまって むしろ独占資本

とによって各国の独占資本を解明するという立場である。とであり、また独占の作用する諸法則をできるかぎり一般化することになって初めて独占価格論は解明されると考えている。このことは資本の集積・集中の発展が独占を生みだす必然性を解明することになって初めて独占価格論は解明されると考えている。このことは資本の集積・集中の発展が独占を生みだす必然性を解明する。これらのことは独占価格論を字野理論として分析することが不る。これらのことは独占価格論を字野理論として分析することが不

前述したように、独占価格を生産価格以上の価格として規定してお 生産価格以上への価格つり上げによる独占的超過利潤の獲得にある 論である。(八頁)。この文章の意味することは、独占価格の本質が とする理論の全面否定である。 の第二は、第一の誤りに立つ人々がもっともよく象徴しているよう 価格を説く立場がこの誤りを象徴しているといってよい。……誤り うとする誤りである。……いわゆる生産価格からの背離として独占 格論を批判されて 次のように 述べておられる。「第一の誤りは、独 規定についてみることができる。序章で著者は、これまでの独占価 をさえとりえなくなってしまっている。その顕著な例は独占価格の 価格論」が不明確なうえ、それと戦後日本を分析する現状分析論と の関連が全くないため本書は構成においても一冊の書物という形態 占というすぐれて段階的規定をもつ対象を原理論のロジックで説こ 理が第一部と第二部にあるということ。 単純な独占価格引き上げ、これによる超過利潤の獲得という理 段階論と現状分析論の関連が全く明らかでなく、矛盾する論 ところが第二部の第六章では著者は (1)の「段階論としての独占

て分析されるという結果になってしまったものと思われる。ないうよりは、宇野理論に忠実たらんとする第一部の新田氏と宇野というよりは、宇野理論に忠実たらんとする第一部の新田氏と宇野というよりは、宇野理論に忠実たらんとする第一部の新田氏と宇野のれるのである。このことは段階論・現状分析論の相互関連のなさられるのである。このことは段階論・現状分析論の相互関連のなさ

私は資本の集積・集中が諸市場構造に市場集中度の高度化と参入を障壁の形成という部門内・部門外の競争を制限する決定的な変化を与えることが、独占価格の本質を生産価格以上に供給制限によってつりあげられた価格であり、その上限が参入障壁によって規定されている。そして独占価格の本質を生産価格以上に供給制限によってつりあげられた価格であり、その上限が参入障壁によって規定されている価格として把握することが必要であると考えている値格として把握することが必要であると考えている。このようとして絶対必要である。独占価格を独占的大企業の戦略機能とするとして絶対必要である。独占価格を独占的大企業の戦略機能とするとして絶対必要である。独占価格を独占的大企業の戦略機能とするとして絶対必要である。独占価格を独占的大企業の戦略機能とするとして絶対必要である。独占価格を独占的大企業の戦略機能とすると、として絶対必要である。独占価格を独占的大企業の戦略機能とするとはできない。

合には一定の価格引き上げが最大の利潤をもたらすと仮定しても、通している。第一部で著者は「アウトサイダーの参入を考えない場る著者の批判に関する問題である。この点では第一部も第二部も共第二の点は独占価格を「引き上げられた価格」とする意見に対す

対必要である。 意味するのである。独占価格が資本間相互の収奪関係を意味するの であって、この意味で「引き上げられた価格」という理論基準は絶 はまさに「生産価格以上の独占的超過利潤の獲得」であるからこそ 上であるかぎり立派に「引き上げられた価格」であるということを 著者も主張されているように技術進歩の激しい現代の社会において た価格」とは「生産価格以上に引き上げられた」と理解している。 わらう資格はない。」(二八四頁)と述べられている。これらの著者の のであり、このことは年々低下してゆく価格であっても生産価格以 は生産価格そのものがコストの低減によって急速に低下傾向にある ような単純なものと考えているのであろうか。私は「引き上げられ 味で理解され、批判されているが、「引き 上げられた 価格」をこの 見解は「引き上げられた価格」を年々価格が上昇してゆくという意 を暗黙のうちに是認していた硬直的マルクス経済学者には、これを 即ひき上げられた価格』あるいは『独占価格即硬直価格』という説 れた独占価格は、その高い水準のゆえに可能であるとすれば、それ 市場の需要を確保することもありうるわけであって、この引下げら 格を高水準にとどめて置くことは不可能だからである。 換 言 すれ との価格水準がアウトサイダー して独占側の主張を反論したあとで「かといって従来の『独占価格 べられ、第二部では、著者は、わが国の独占価格の低下傾向にたい も一種の立派な独占価格というべきなのである。(四五~六頁)と述 サイダーの参入を阻止するために、 の参入を可能にするかぎり、 独占価格を引下げ、 独占価

> 題である。 第三の点は、 著者の市場構造、 市場行動のとらえ方についての問

製品差別化政策の結果としての市場構造の変化による独占価格であ り、それはむしろ市場構造の中で解明すべきであると考える。 品差別化価格は管理価格・カルテル価格とは違って市場行動である 化価格と管理価格との区別があいまいな結果となってしまう原因と 製品差別化政策の結果としての市場構造の同一部門内における競争 ることを可能にすることになるのであると考えている。それゆえ製 な費用によって一種の内部障壁を形成することが差別価格を設定す ては、資本の集積集中による独占的大企業が広告宣伝費などの膨大 の両側面をもつ競争の中間的形態と考える。そして独占段階にお なっている。私は製品差別の本質を同一部門内競争と異部門間競争 とは混乱を招くことになる。このことは実証分析において製品差別 の分離による価格形態であり、 調行動を基準にした市場行動としての独占価格形態であり、後者は 差別化価格を一括してとりあつかっているが、前二者は寡占間の協 著者は独占価格の形態として管理価格、 一括して独占価格としてあつかうこ ルテル価格、

角生産、目資本集中の三点にわたって強調されているが、その要因 造にどのような影響を与えるのかはあきらかでない。多角生産・ の独占利潤の源泉と国家市場をあげておられるが、これらが市場構 が理論的に未整理である。政府に対する影響力では、国家を通じて 一般的集中の市場構造に与える影響を一政府に対する影響力、 一般的集中の市場構造に与える影響についての問題。著者は (<u>;</u>) 多

格決定にいかなる影響を与えるのかという問題は、わが国でも だ未開拓の分野であり今後に残された課題であるといえよう。 ているとはいえな 益集団などの市場構造、独占価格設定に与える影響も充分分析され しかしながらこれらの要因が個別的市場の価 ŧ

されてないのは残念である。特に著者が強調された「特殊日本的なを強調されたが、わが国の市場構造分析においてこの点が全く解明 占形成の特質が各独占価格のあり方にとって重要な意味をもつこと (1) 第四の点は、わが国の独占価格の実証分析に関する問題である。 著者は「産業組織論」批判の中で、各国資本主義における独

寡占の市場構造、

いことがわが国の市場構造の具体的分析を不充分なもの と し て

'n

いわゆる企業系列の存在」(一五一頁)の分析がな

ないことが本書の実証分析を不充分なものにしている。 的分析がなされる必要がある。 碩夫氏などのすぐれた指摘があるので、各品種別の参入障壁の具体 が国の参入障壁全般の特質については、すでに中村秀一郎氏や杉岡 (2) 参入障壁の各品種別の具体的解明がなされていないこと。わ かような具体的な参入障壁の分析の 特にわが国

> 必要である。 の独占価格の水準決定との関連からしてぜひとも参入障壁の分析は

の点からしても実証的に明らかにすべきであろう。 本的形態としてのカルテルを強調される根拠をなすものであり、 市場行動の具体的分析がないこと。このことは独占価格の日 そ

っている。 独占利潤分析がほとんどなされてないことがこの主張を弱めてしま は価格低下がありながらも独占価格であるとする著者の根拠である 独占利潤の分析がなされてないこと。戦後わが国の市場価格

構造との関連で解明しようとした点で、 ければならない問題でもある。本書は独占価格を独占資本主義の全 以上本書の問題点を指摘してきたが、これらは私が今後追求しな え 高く評価されよう。 種々の問題点を含むものと

(日本評論社・現代経済全書・一九六七年一二月刊・B6・二八

四頁・六八〇円)